松沢研究奨励賞受賞者　研究報告

学びを豊かにする生徒の育成

～わかる　使える　役に立つ～

教育人間科学部学校教育課程　H25 年３月修

藤沢市立高浜中学校　教諭　大野　仁寛

１　研究の概要

本研究は、藤沢市立高浜中学校が2020年から2022年にかけて実施した教育研究活動に基づいており、「学びを豊かにする生徒の育成」をテーマに進められました。このテーマのもと、生徒が学んだことを理解し、実生活に役立てる能力を育むことを目指しました。また、「わかる 使える 役に立つ」という副題を掲げ、学びが単なる知識の獲得にとどまらず、生活や将来に生かせるものとなるような授業設計を進めました。これにより、教師と生徒が共に育ち合う学びの場を作り上げることを目的としました。

２　研究の背景と目的

本校が取り組んだこの研究は、藤沢市教育委員会の指定を受けた研究推進校としてスタートしました。研究テーマ「学びを豊かにする生徒の育成」に込められたのは、学びの本質を追求し、生徒にとって「わかる」「使える」「役に立つ」学びを提供することでした。これを実現するために、以下のような具体的な取り組みを行いました。

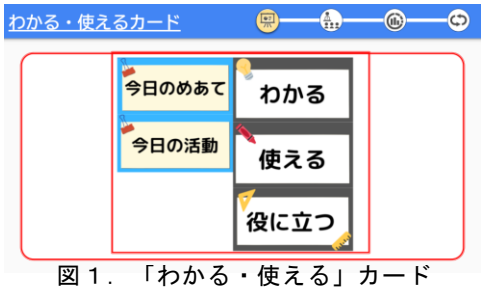

図１．「わかる・使える」カード

(1)「わかる」授業の構築

各授業で学習のねらいを明示し、生徒が「何を学ぶのか」を理解できるようにしました。そのために「わかる・使えるカード」を活用し、授業のポイントを視覚的に示しました。さらに、ＩＣＴツールを活用し、生徒が復習や自己評価をしやすい環境を整えました。

(2)「使える」学びの実践

知識の習得だけでなく、それを実際の場面で活用できるようにするため、外国語科では文法知識の定着を基礎としつつ、実際の会話での使用を重視しました。例えば、スピーチやロールプレイ、即興での対話活動を取り入れ、生徒が実際の文脈の中で英語を使う機会を増やしました。また、Google Classroomを活用した課題提出やフィードバックにより、学習内容を日常的に振り返ることができるようにしました。

(3)「役に立つ」学びの実現

学習が生徒の生活や将来にどうつながるのかを意識させるために、教科横断的な活動を取り入れました。例えば、英語の授業では「卒業旅行で行きたい場所をプレゼンしよう」という課題を設定し、生徒が自分の興味関心と学びを結びつけられるよう工夫しました。さらに、ＩＣＴの活用を進める一方で、紙媒体との併用を意識し、ＩＣＴの使用が目的化しないよう配慮しました。

特に、学習指導要領改訂やコロナ禍の影響を受けた新しい学びの形に対応し、オンライン学習やＩＣＴを駆使した教育活動の中で、どのようにして生徒が主体的に学びを深め、実社会に役立つ力を育むかが重要な課題となりました。

生徒が自分の学びに対して興味を持ち、それが実際の生活にどのように活かせるのかを感じさせることを最終的な目的としました。また、生徒が日常生活の中で学んだことを活用できる能力を養うために、言語能力を含む各教科での活動において「学びの実用性」を重視しました。

３　研究アプローチと実践内容

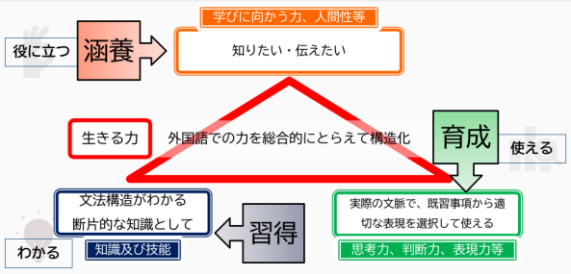

図２．外国語のグランドデザイン

外国語の授業では、基本的な文法知識の習得（わかる）にとどまらず、それを実際の文脈で使えるようにする（使える）ことを重視しました。ＩＣＴを活用した授業では、Google Classroom や Google Forms を利用して、生徒一人ひとりが積極的に学びに参加できる環境を整えました。これにより、教材の共有や評価、フィードバックがスムーズに行われ、生徒の学習意欲を高めることができたと考えます。

単元ごとの学習活動は「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を実現することを意識して組み立てました。たとえば、英語の授業では、実際のコミュニケーションの中で学んだ表現を使い、相手に伝えたり意見を交換したりする活動を多く取り入れました。このような学びを通じて、生徒たちは単なる知識の習得にとどまらず、その知識を他の教科や日常生活に活用する力を身につけました。

４　実践結果と分析

研究期間中、毎年生徒に対して授業アンケートを実施し、その結果をもとに授業の改善が行われました。生徒の学習に対する関心や授業内容の理解度、実生活での活用についての認識がどのように変化したかを確認しました。アンケート結果によると、学年が進むにつれて、生徒の「授業に対する興味・関心」が高まり、「授業の目的やねらいを理解し、取り組んでいる」との回答が増えました。（例：授業のねらいを理解して取り組んでいますか？１年次76.6%→２年次82.5%→３年次89.8%）これは、「わかる・使える」カードによって学習事項が明示化され、安心して学習に取り組めるための手立てとして役立ったことによるものと考えられます。しかし、「学んだことが他の教科や学校生活で役に立ったか？」という問いに対しては、一定の成果が見られたものの、全体的にはさらに実生活で役立つ学びの実感を得るための工夫が必要であることがわかりました。

外国語科においては、実際の言語活動の中で生徒が学んだ内容をどのように使用しているかに焦点を当て、会話の中で使える表現を練習することを多く行いました。この取り組みは、生徒が自信を持って英語を使う力を育てる助けとなりました。アウトプットの機会を設けることによって生徒相互のやりとりの中で学びを深めることの大切さが、他の教科でも共通してあらためてわかりました。

５　今後の課題と展望

本研究をさらに発展させるためには、学習内容が生徒の生活や他の学問領域とどのように関連しているかをより強調し、学びの実用性を実感できる授業設計が求められます。そのために、以下の点が課題となりました。

(1)学びの「主体性」を促す取組み

○英語の題材を生徒自身の経験や興味関心と結びつけ、自分事として捉えられるようにする。

○「自分はどう思うか」を表現する機会を増やし、思考力や判断力を養う。

(2)「対話的な学び」の充実

○生徒が他者とのやり取りを通じて学びを深める機会を増やす。

○「相手に伝える」という意識を持たせ、実践的なコミュニケーション力を伸ばす。

(3)「深い学び」の実現

○知識を単独のものとして学ぶのではなく、他の学問領域や日常生活と関連付ける。

○知識を技能へとつなげ、実際に活用できる学びを目指す。

ＩＣＴの活用についても、使用が目的化しないようにし、学習の質を高めるための適切な場面で活用することが求められます。特に、紙媒体との併用を意識し、ＩＣＴを単なるツールとしてではなく、学びのサポートとして効果的に使用する工夫が必要です。

６　結論

３年間の研究活動を通じて、「わかる　使える　役に立つ」を実現するための教育活動が進展し、生徒が主体的に学び、学んだことを実生活に生かす力を育むための基盤が整いました。しかしながら、教育の成果は即時に表れるものではなく、卒業後にその価値を実感する場面が訪れることもあります。そのため、今後も授業の精度を上げ、学びをより実生活に結びつける工夫を続けていく必要があります。

この研究をさらに深化させることで、生徒が将来に向けて「生きる力」を養い、学びを自分の人生に活かせるような教育を提供し続けることが、今後の重要な課題となります。